

日本語学習者の作文の媒体としての下書き

石毛順子

〔キーワード〕 作文、下書き、媒体、Vygotsky

〔要旨〕

日本語学習者が下書きを用いているのか、そしてどのような下書きが特徴的に見られるのかという点について検討した。対象者は、韓国語を母語とする初級中期群の学習者27名、中級移行期の学習者26名、中級中期の学習者21名であった。多くの学習者が下書きを書いてはいたが、レベルが上がっても下書きを使用しない者もいた。そして特徴的な下書きとして3つのタイプが抽出された。1つ目は作文全体の重要な事柄が簡単に書かれているタイプであった。初級から中級にあがるにつれ使用者が増えていたものの、使用する者は非常に少なかった。2つ目は文字や語彙の確認のみが行われているタイプであった。人数は少ないが、レベルによって使用する学習者の割合は変化していなかった。3つ目は原稿用紙に書かれた作文とほとんど同じ作文が書かれているタイプであった。初級から中級にあがるにつれ使用者が減っていたが、一番多くの学習者が利用していた。

1. 問題と目的

学習者が第二言語で作文を書くという活動を考えるとき、考慮しなくてはならないものとして、作文活動の媒体が考えられる。人間の活動を扱うときは、主体と対象の二者関係ではなく、主体と媒体と対象の三者関係を分析の最小関係とするべきであり、媒体を無視することはできないという理論を提案しているのは、ソビエトの心理学者ヴィゴツキー（Vygotsky, L.S.）である（田島1996）。なぜこの三者関係が最小なのかというと、人間が外界の対象に働きかけるときには媒体が単に活動を容易にするのではなく、媒体が活動そのものを形作るため、人間の活動は主体 対象という二者関係ではなく、媒体を考慮することなしに人間の活動を理解することはできないからである（田島1996）。

本研究で扱う活動は、学習者が第二言語で作文を書くという活動である。つまり、主体は学習者、対象は第二言語で書かれる作文である。では、大前提としての書くための言葉のほかに、媒体はどのようなものが考えられるだろうか。書くとは、自分の考えを想像し、形式を付与し、考えを精緻化していくプロセスであり、わかりやすい文章を書くには、内容について作文を書く前に十分に考えることが必要である（倉八1997）と述べられているように、作文活動はプロセスが非常に重要な役割を持っている。

図1 作文産出過程のモデル Hayes and Flower (1980: 11)

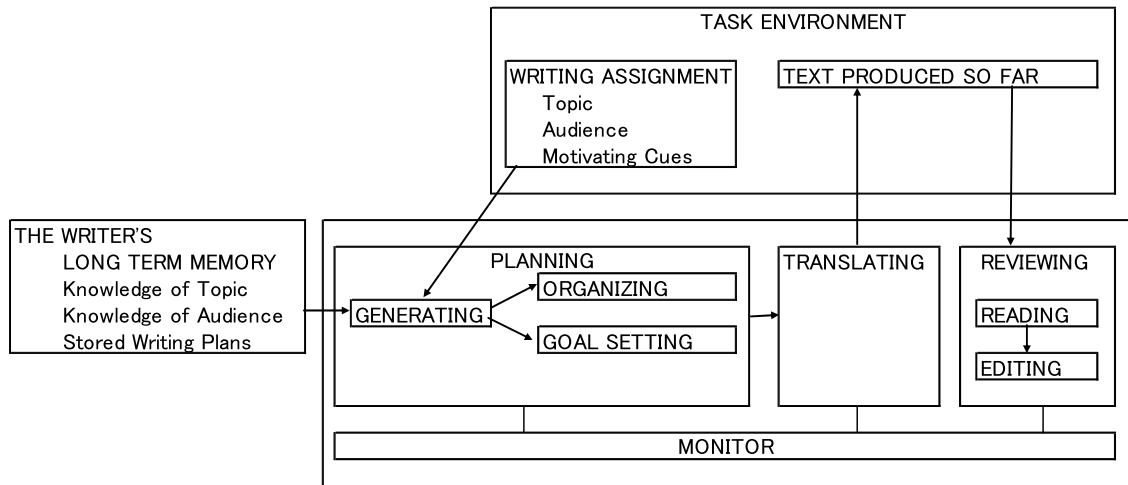


図1で示したHayes & Flower (1980)のモデルを見てみると、作文活動は単線的な活動ではなく、過程をモニタリングしながら「行きつ戻りつ」を繰り返す活動である。そのモニタリングの作文活動を教育の現場に当てはめ、指導・教育に寄与できるということを考慮すると、下書きが有効に機能する媒体として考えられる。下書きを媒体として捉え、学習者の下書きの使用状況を見てみると、優れた書き手に比べて、下手な書き手は計画に時間をかけない (Pianko1979)。それに対して熟達した書き手は書く前に自分の考えをまとめるのに時間をかけている (Zamel1982)。したがって、下書きはプロセスをスムーズにするだけでなく、作文活動とその結果である作文自体を変革する作用を持つ媒体であると考えられる。以上を踏まえ、本研究で取り扱う媒体として下書きを取り上げる。

日本語学習者を対象とした研究では、書き方を指示してアウトラインを書かせたり、下書きを書くよう教示して下書きを書かせたりした上で作文を評価している研究は見られるが、下書きそのものを分析しているものは少ない。以下に先行研究として2点を取り上げる。

大竹・園田・広江 (1993) は英語母語話者である中級・上級の日本語学習者の作文過程について調査した。その結果、内容のプランをたて、順序を決定する過程において、計画および pre writingを書く学習者がいるが、日本語能力が高い学習者が書いた計画は短くて簡単なものであるが、低い学習者の書いた計画は詳細であり長かった。また、pre writingは日本語能力が低い学習者が行っており、かつ作文として完全な形で書かれている場合が多かった。

矢高 (2004) は中級・上級の日本語学習者の想起とアウトラインを評価した。想起は全体的評価、アウトラインは作文の内容を表す重要な要素である考えが書かれているか・各項目を簡単な語句で表しているか・構成が階層的になっているかという基準を用いて評価した。その結果、中級より上級のほうが想起・アウトラインともによかった。しかし、矢高 (2004) においても、作文課題から思いつくことを5分間でできるだけたくさん書く、作文のアウトラインを

5分で書くというように、想起とアウトラインの手順が示された上での下書きを分析していた。

また、大竹ら（1993）、矢高（2004）ともに作文や小論文の学習が進んだ中級から上級を対象としているが、初級から中級にかけての調査も必要であると思われる。なぜなら発達の最近接領域にあった指導をするためには、まず学習者の実態を明らかにし、最近接領域を検討する必要があるからである。発達の最近接領域とは、人間の現在の発達水準と、指導や自分より能力のある仲間との共同の中で問題を解いていくことによって決定される可能性の発達の水準との間の相違（Vygotsky1935/2003）であり、この相違の間のみ、その教科の教授の最適の時期が存在する（Vygotsky1934/2001）。そのため、望ましいとされている下書きが要求として高すぎるのではないかと、そして実際に用いられているのか見てみる必要がある。Flower & Hayes（1980）は望ましい下書きを、作文全体を考察するために必要な程度は書かれているが、かつ簡単であるものとしており、矢高（2004）でも評価基準としているのは、上述のようにアウトラインは作文の内容を表す重要な要素である考えが書かれているか・各項目を簡単な語句で表しているか・構成が階層的になっているかという基準である。したがって、望ましい下書きは作文全体の重要な事柄が簡単に書かれているものと考えられるだろう。本研究においては、作文全体の重要な事柄が簡単に書かれているものを「望ましい下書き」とし、分析を行っていくこととする。

以上を踏まえ、本研究では学習者は下書きを行っているのか、そして「望ましい下書き」が書かれているのか、「望ましい下書き」以外にはどのような下書きが特徴的に見られるのかを検討することを目的とする。

2. 方法

2.1 調査参加者

本研究では韓国語を母語とする日本語学習者を対象とした。なぜなら平成17年において日本国内における日本語学習者で最も多いのは中国語母語話者であるが、韓国語を母語とする日本語学習者はそれについて多いという文化庁文化語課による報告があり、また韓国は漢字文化圏であると言われているものの、1968年に朴正熙大統領がハングル専用促進に関する七項目の指示を出して以来、漢字教育はあまり行われていないということから、非漢字圏の学習者を今後の研究対象とする際の手がかりとすることができると考えられるからであった。

韓国語を母語とする日本在住日本語学習者で、都内日本語学校に在籍する学生が調査に参加した。それぞれのレベルに進級、またはそのレベルから入学するためにはその下のレベルの期末テストまたはプレースメントテストに合格することが要求された。参加者の属性を表1に示す。

表1 参加者の属性

ク ラ ス	在籍クラスで求められるレベル(学習時間)	群	平均滞日期間 ()内は標準偏差	人 数
ク ラ ス 1	約125時間	初 級 中 期	2.4ヶ月 (1.0ヶ月)	27人
ク ラ ス 2	約250時間	中級移行期	5.6ヶ月 (2.6ヶ月)	26人
ク ラ ス 3	約380時間	中 級 中 期	7.4ヶ月 (3.4ヶ月)	21人

それぞれのクラスで約85時間程度学習が進んだ時点で調査を行った。日本語能力試験の3級において学習時間300時間程度を初級修了、2級において学習時間600時間程度を中級修了としていることから、本調査では以後、クラス1在籍者を初級中期群、クラス2在籍者を中級移行期群、クラス3在籍者を中級中期群と呼ぶ。

2.2 調査時期

2002年5月下旬から6月上旬にかけて初級中期群、中級移行期群、中級中期群の全ての調査を行った。中級移行期群、中級中期群の被験者数が少なかったため、中級移行期群、中級中期群に関しては9月上旬に追加募集を行った。条件が異ならないよう、5月と6月に調査に参加していない学習者を対象者とした。

2.3 作文のテーマ

作文のテーマは「韓国の食べ物(食生活)と日本の食べ物(食生活)」、「韓国の住居と日本の住居」、「男と女」であった。参加者は、この3つの中から1つを自由に選択して作文を行うことが求められた。これらのテーマは日本語学習者の作文過程を扱った石橋(2002)で使用されており、また、調査対象の日本語学校では「私の国の」というテーマで作文やスピーチがなされることが多く、参加者にとってなじみが深いと考えられることから設定された。英語学習者の作文過程を扱ったKobayashi & Rinnert(1992)においても「映画とビデオ」、「田舎の生活と都会の生活」、「車と自転車」、「高校生活と大学生活」という比較のテーマであった。

2.4 手続き

テーマは作文を書くときに提示した。所要時間は約40分であった。長さの指定はしなかった。白紙と作文用紙とペンを配布し、必要に応じて下書きやメモに白紙を使用してもよいとした。辞書の使用や友人に尋ねることなど、参加者が作文を書く際に必要と感じることは全て許可し

た。

3. 結果

必要に応じて下書きに使用してもよいと教示された白紙がどのように使用されているのを見てもみた。すると、まず下書きを書いていない者と書いている者が見られた。学習者のレベルと下書き使用の関係の傾向を検討するために、フィッシャーの直接法で分析を行った。

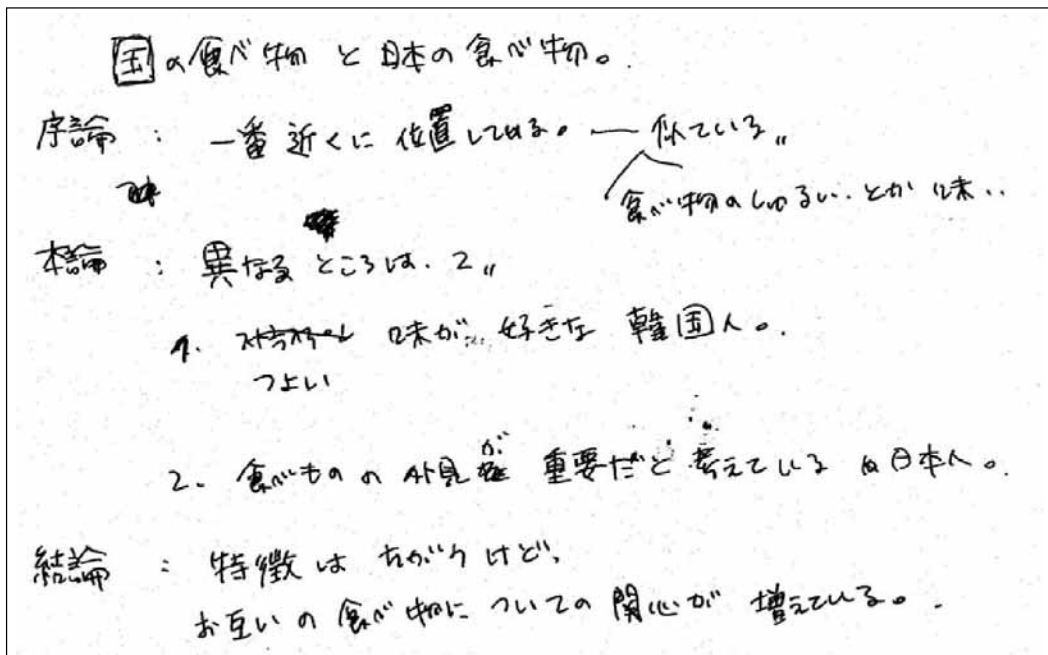
表2 レベルによる下書き使用の違い

	下書きなし	下書きあり	計
初級中期	5	22	27
中級移行期	4	22	26
中級中期	2	19	21
計	11	63	74

表2において、人数比率の偏りは有意ではなかった。

次に、書かれている下書きを見てみると、特徴的なものとして3つのタイプが抽出された。1つは、1. 問題と目的で「望ましい下書き」として定義した、作文全体の重要な事柄が簡単に書かれているものであった。例を図2に示す。

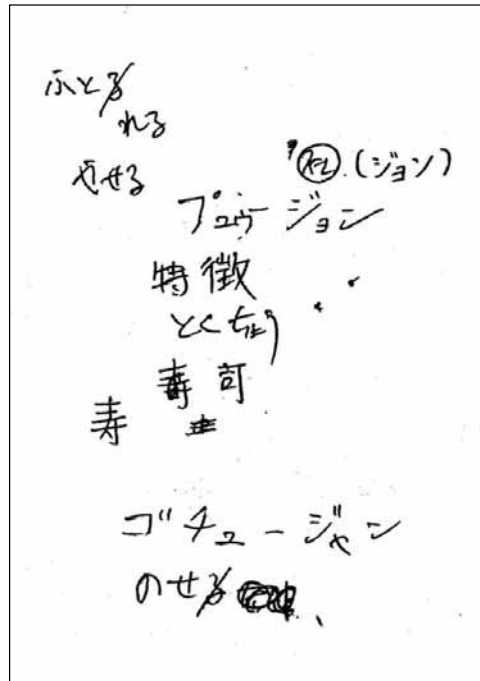
図2 作文全体の重要な事柄が簡単に書かれている「望ましい下書き」の例



2つ目は、「望ましい下書き」が書かれておらず、文字や語彙の確認のみが行われているも

のであった。例を図3に示す。

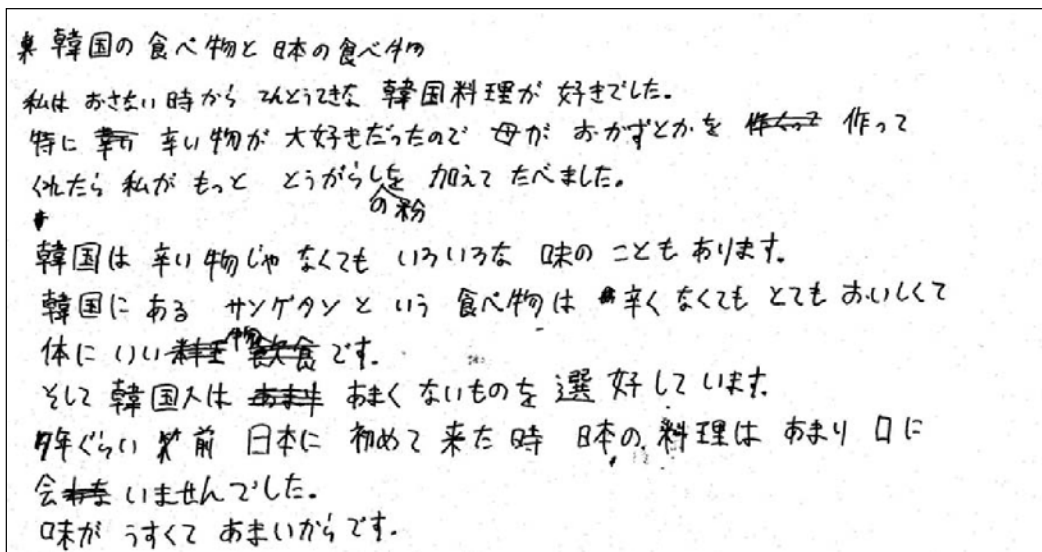
図3 文字や語彙の確認のみが行われている下書きの例



()内は参加者が書いたものではなく、
左にあるハングル文字を音声化したもの

3つ目は、「望ましい下書き」が書かれておらず、原稿用紙に書かれた作文と内容、構成ともにほとんど同一の作文が下書きとして書かれているものであった。例を図4に示す。

図4 原稿用紙に書かれた作文と、内容、構成ともにほとんど同一の作文が下書きとして書かれている例



日本語学習者の作文の媒体としての下書き

日本の昔のケーキもとてもあまいと感じました。
でも今体 考えが^か変ります
今も日本は辛い物はあまりありませんが、ケーキなどはあまく
感じません。
韓国から留学のため日本に来た学生によると普通男子はやせて
なれ、女子はふとってなると言われました。
その理由はなぜかはわかりませんが今の私の^周りを見たら
~~そう~~ そのことはそうだと思います。
韓国の料理は日本に、日本の料理は韓国に輸出されて
いますが~~同じ~~ たぶん同じの味だとは言えなさそうです。
この前日本に輸出された韓国の新ラーメンを食べたことがあります
これもやはり違う味でした。
私の考えでは韓国の食べ物は韓国の味まま、日本の食べ物は
日本の味まま 残したほうがいい^かと思います。

下書きを書いている学習者の中で、学習者のレベルと「望ましい下書き」の使用状況の関係の傾向を検討するために、フィッシャーの直接法で分析を行った。

表3 レベルによる望ましい下書き使用の違い

	望ましい下書きなし	望ましい下書きあり	計
初級中期	21	2	22
中級移行期	18	4	22
中級中期	15	4	19
計	54	9	63

表3において、有意な人数比率の偏りが見られた ($p < .05$)。

下書きを書いている学習者の中で、学習者のレベルと文字や語彙の確認のみが行われている下書きの使用状況の関係の傾向を検討するために、フィッシャーの直接法で分析を行った。

表4 レベルによる文字語彙の確認のみを行っている下書き使用の違い

	文字語彙の確認のみ	文字語彙の確認以外	計
初級中期	5	17	22
中級移行期	5	17	22
中級中期	3	16	19
計	13	50	63

表4において、人数比率の偏りは有意ではなかった。

下書きを書いている学習者の中で、学習者のレベルと、原稿用紙に書かれた作文とほとんど同一の作文が書かれている下書きの使用状況の関係の傾向を検討するために、フィッシャーの直接法で分析を行った。

表5 レベルによる原稿用紙に書かれた作文とほとんど同一の作文が書かれた下書き使用の違い

	原稿用紙に書かれた作文 とほとんど同一の作文	原稿用紙に書かれた作文と ほとんど同一の作文以外	計
初 級 中 期	13	9	22
中 級 移 行 期	9	13	22
中 級 中 期	9	10	19
計	31	32	63

表5において、有意な人数比率の偏りが見られた ($p < .05$)。

4. 考察

学習者の下書きの使用と、「望ましい下書き」の使用、そして特徴的に見られる下書きについて検討する。1. 問題と目的で示したように、作文は話すという線条性の強い活動と異なり、草稿が書かれたり、読み返しが行われたり、編集が行われたりするような「行きつ戻りつ」のできる活動である。石毛(2007)においても、作文の成績のよい学習者が読み返しを行っており、「行きつ戻りつ」は作文が上手になったからなくなるというわけではないという結果が得られている。したがって、書くことは「行きつ戻りつ」のできる活動であるということ念頭に置きながら、媒体としての下書きを考えてみる必要がある。

白紙を下書きに使用した者の割合は初級中期・中級移行期・中級中期のレベルで有意な偏りはなく、多くの者が下書きを書いているが、レベルが上がり、作文や小論文の指導が一層なされるようになって下書きを使用しない者もいることが伺えた。わずかであるとはいえ、レベルがあがっても下書きを書かずにそのまま作文を書くという学習者がいるということは、書く活動の特性である「行きつ戻りつ」のできることを十分に認識できておらず、また学習に生かしていないということも考えられるだろう。

次に、書かれている下書きを見てみると、特徴的なものとして3つのタイプが抽出された。1つ目は、1. 問題と目的で「望ましい下書き」として定義した、作文全体の重要な事柄が簡単に書かれているものであった。なぜ望ましいのか再度考えてみると、自ら考えた構成が作文を書き進める際に参照できるために、書き手が深めたい思考の内容が「行きつ戻りつ」の推敲の中で目的に沿って深められるからだと思われる。初級より中級の方が使用者が増えており、「望ましい下書き」を身につけている者が作文教育の進んだ中級において増えていることが伺えた。しかし、増えているというものの、「望ましい下書き」を使用するものは非常に少なかっ

た。したがって、この「望ましい下書き」に移行させるためには、他に用いられている下書きを検討する必要がある。

2つ目は、文字や語彙の確認のみが行われているものであった。このタイプは、Flower & Hayes (1980) の定義した、作文全体を考察するために必要な程度は書かれているという条件を満たしておらず、作文全体を見通すという機能を果たしていない。その意味では下書きを使用していない学習者と違いはない。また、語彙や文法に関しても、下書きに表したわずかなものしか役に立てることができていない。人数は少ないが、学習者のレベルによって人数比も変化していないので、書くという活動の特殊性と下書きの意義を、下書きを書いていない学習者と同様に理解させる必要があるだろう。

3つ目は、原稿用紙に書かれた作文と、内容、構成ともにほとんど同一の作文が下書きとして書かれているものであった。人数比の偏りが見られ、初級では多く見られたが、中級では減っていた。本研究の結果は、1. 問題と目的で述べた大竹ら (1993) における日本語能力が低い学習者が下書きとして完全な作文を書く傾向があるという知見と軌を一にするものであった。原稿用紙に書かれた作文と内容、構成ともにほとんど同一の作文が書かれている下書きは初級では多く見られたが、中級では減っていたということから、中級で「望ましい下書き」に移行した可能性も考えられるが、中級において一番多くの学習者が行っているタイプの下書きであった。この「原稿用紙に書かれた作文と内容、構成ともにほとんど同一の作文が書かれている下書き」はFlower & Hayes (1980) の定義した、作文全体を考察するために必要な程度は書かれているという条件を満たしてはいるが、簡単なものではない。下書きに書かれた「原稿用紙に書かれた作文と内容、構成ともにほとんど同一の作文が書かれている下書き」を見てみると、図4に示した下書きに代表されるように、語彙レベルの編集は行われているものの、文や段落の移動がほとんどされておらず、構成をよりよいものにする活動が行われていなかった。つまり、非常に多くの量を書いているものの、「文字や語彙の確認のみが行われているもの」と、文章全体の構成に及ぼす効果はあまり変わらないとも思われる。したがって、「文字や語彙の確認のみが行われているもの」と「原稿用紙に書かれた作文と内容、構成ともにほとんど同一の作文が書かれている下書き」は、序論・本論・結論のキーワード(あるいはキーになるような文)が書かれている望ましい下書きと比較すると、構成を意識した準備が不十分であると考えられるのではないだろうか。確かに、「原稿用紙に書かれた作文とほとんど同様の作文」は、書く過程の中で思考は深められていくものの、書く方針があらかじめ決められていないために、深めるべき思考の内容が深めていけず、まとまりをなさない思考がそのまま文章として表される可能性があると思われる。しかし、作文全体の重要な事柄が簡単に書かれている「望ましい下書き」をほとんどの学習者が行っていなかったことを鑑みると、作文全体の重要な事柄が簡単に書かれているタイプの下書きを直ちに全ての学習者に提案することは、

発達の最近接領域を超えてしまうと考えられる。作文全体の重要な事柄が簡単に書かれているタイプの下書きに導くため、発達の最近接領域にあった、その前段階の下書きを考える必要があるだろう。3つ目の原稿用紙に書かれた作文とほとんど同一の作文が書かれているタイプの下書きを最も多くの学習者が用いていたため、多くの学習者の現時点での発達領域は「全部をまず書いてみる」ということにあると思われる。そこで、全部書いてみる下書きを認めつつ、その上の発達水準を求めるといった提案が行えると思われる。文法的に正しくない心の中の言葉、つまり内言を正確さの要求される書き言葉にする作業は困難を伴う(Vygotsky1935/2003)。そのため、このタイプの下書きでは、まず内言を書き言葉にして、紙に表して確認するということが行われているのではないだろうか。作文は「行きつ戻りつ」のできる活動であるが、原稿用紙に書かれた作文と内容、構成ともにほとんど同一の作文が書かれている下書きの場合、編集がなされていたのは、語彙や文法のレベルに留まっていた。そこで次の段階として、一度全部書いた上で、それぞれの段落のつながりや結論とのつながりを考え、大きく書きなおすような、構成に目を向ける下書きを提案してはどうだろうか。構成に注意が行くようになったら、次の段階として作文全体の重要な事柄が簡単に書かれているタイプの下書きをした上で、内言を書き言葉に表す困難をサポートするために、原稿用紙に書かれた作文と内容、構成ともにほとんど同一の作文が書かれている下書きを書くという、2種類の下書きを書いてみるという提案ができると考えられる。またさらに次の段階として、書き言葉に表すことに困難を感じないようになれば、作文全体の重要な事柄が簡単に書かれているタイプの下書きのみに移行することもできるだろう。

以上のように、日本語学習者が作文を書くときほとんどの学習者が下書きを用いていることを明らかにし、用いられている下書きを3つのタイプに分類した。そして、発達の最近接領域の観点から考えられる下書きの提案を行った。しかし、下書きのタイプの分類はこの3つの分類の方法だけではなく、様々な分け方ができると考えられる。また、その分け方からさらに有効な提案ができるとも考えられる。今後も、学習者の下書きを注意深く吟味し、よりよい提案ができるようにさらに考察を進めていきたい。

〔参考文献〕

- 石毛順子(2007)「日本語学習者の作文過程 学習段階と分析的評価の視点から」、『2007年度日本語教育学会2007年春季大会予稿集』、170-175
- 石橋玲子(2002)『第2言語習得における第1言語の関与』風間書房
- 大竹弘子・園田愛・広江浩一(1993)「THINK ALOUDプロトコルを用いた日本語学習者の作文過程及びストラテジーの分析」、『1993年度日本語教育学会秋季大会予稿集』、105-110
- 倉八順子(1997)「コミュニケーションのための文章表現技術とその指導法についての考察. 1」、『明治大学

日本語学習者の作文の媒体としての下書き

- 人文科学研究所紀要』41号、157-168
- 田島信元 (1996) 「ヴィゴツキー 認識の社会的構成論の展開Ⅱ 共同性論の系譜」『別冊発達』20号、74-94
- Vygotsky, L. 柴田義松 (訳) (2001) 『思考と言語』新読書社 (. 1934.)
- Vygotsky, L., 土井捷三・神谷栄司 (訳) (2003) 『発達の最近接領域 の理論 教授・学習過程における子どもの発達』三学出版 (. 1935.)
- 文化庁文化語科「平成17年度国内の日本語教育の概要：日本語学習者数(国・地域別)(上位20か国)」
http://www.bunka.go.jp/1aramasi/17_nihongokyoku/gaikoku_6_16.html 2007年8月17日参照
- 矢高美智子 (2004) 「第二言語作文のプランにおける第一言語使用の影響」『日本語教育』121号、75-85
- Flower, L. & Hayes, J. (1980) The dynamics of composing: Making plans juggling constraints. In Gregg, L. & Steinberg, E. (Eds.) *Cognitive processes in writing*. Hillsdale, N.J.: Lawrence Erlbaum Associates.
- Hayes, J. & Flower, L. (1980) Identifying the organization of writing processes. In Gregg, L. & Steinberg, E. (Eds.) *Cognitive processes in writing*. Hillsdale, N.J.: Lawrence Erlbaum Associates.
- Kobayashi, H. & Rinnert, C. (1992) Effects of First Language on Second Language Writing: Translation versus Direct Composition. *Language Learning*, 42, 183-215.
- Pianko, S. (1979) A description of the composing processes of college freshman writers. *Research in teaching of reading*, 13, 5-12.
- Zamel, V. (1982) Writing: The Process of Discovering Meaning. *TESOL Quarterly*, 16, 195-209.